

【翻訳】

## ロバート・ブラウニング 「サウル」

吉 門 牧 雄 訳

1

アブネルは言った。  
「ついに、あなたは来てくださった！  
私が語り、あなたが話す前に、  
頬に口づけして、幸運を祈ってください！」  
そこで、私は幸運を祈り、彼の頬に口づけした。  
すると、彼は言った。  
「ああ、私の友よ、王があなたを呼びにやられて以来、  
私たちは飲むことも食べることもしませんでした。  
あなたが戻ってきて、  
王がまだ生きておられるという確証を示してくれるまでは、  
飲むことも食べることもせず、  
唇を蜂蜜で輝かせ、水で潤すこともありません。  
黒い中央の天幕の中から、まる三日間、  
祈りの声も賛美の声も、  
あなたの僕たちには漏れて来ません。  
サウルと悪霊の戦いが終わり、  
勝ちにしたものの気が遠くなって、  
王がやっと命の側に戻って来たことを知らせる声は、  
まだ聞こえて来ないのです。」

2

しかし今、ああ、敬愛するお方よ、私の胸は高鳴ります、  
優雅なる金髪に恵の露を受けた、神の子よ、  
あなたの豎琴の弓に絡ませるよう、摘み取られたばかりの花々が、  
いまだに青々と生きています。  
自然の熱が猛威を振るって、  
荒野を苦しめることなどなかったかの様に。」

## 3

その時、私は相応しい所作に従って、  
父祖の神の御前に跪いた後、急に立ち上がって、  
日に焼けて粉になった砂の上を走って行った。  
天幕は開いていた。  
私は立ち入りを禁ずる槍を引き抜き、身を屈めた。  
草は全て枯れてなくなっている、  
次の囲い地まで伸びた滑りやすい草地の上に、  
両手、両膝をついて這いずり、  
手探りで進んで、ついに幕の裾が開く場所が分かった。  
そこでもう一度祈り、裾を開けて中に入ったが、  
怖くはなく、「あなたの僕、ダビデが参りました」と告げた。  
だが、答える声は聞こえなかった。  
最初、見えたのは暗闇だけだった。  
だが、すぐに暗闇よりももっと黒いものを見つけた。  
それは天蓋を支えている、直立した巨大な心柱しんぼしらだった。  
すると、柱を背にしてゆっくりと一つの姿が視界に入ってきた。  
その姿は巨大で、あらゆるものの中で最も黒いものであった。  
すると光線が見えて、天幕の天井から差し込み、  
サウルを映し出した。

## 4

サウルは、天幕の柱のように直立していた。  
両腕は、中心から両側に向かう大きな十字の支えに寄りかかり、  
広く伸びていた。  
彼は筋肉を緩めることもなく、そこに凭れかかっていた。  
あたかも激痛に苦しみながら、  
春の訪れとともに解放がやって来るまで、  
脱皮を待ちながら、仲間の蛇からはるか離れて、  
松の木にぶら下がっている大蛇の様に、  
悲しみに満ち、身もこわばり、目も見えず、口もきけず、  
サウルは苦悶していた。

## 5

それから、豎琴の音色を調整した。  
真昼の刀のような日光で弦が切れないように、  
弦の回りに巻いていた花を取り払った。  
最初に、羊たちが皆知っている曲を奏でた。  
その曲を聴けば、囲い入れが終わるまでに、  
一頭一頭、羊が囲いの門まで従順に帰って来る曲だ。

羊の毛並みは白く、茂みで傷つけられてもいない。  
 見よ、長い草が小川の水を塞いでいる所で、  
 羊は草を食み、今や一頭また一頭とねぐらを探している。  
 その姿は、かくも青くかくも遠い、  
 頭上遥かな黄昏の青空に、星が星の後を追って現れるようだ。

## 6

さらに、別の曲を演奏した。  
 この曲を聴くと、小麦畑のは連合いを後に残して、  
 奏者に向かって飛んで行き、  
 蟋蟀こおろぎは元気づけられて、互いに勇敢に戦う。  
 次には、これを聞けば敏捷な飛鼠とびねずみも、  
 砂の家の前で沈黙考するような曲を弾いた。  
 不思議と言って、この飛鼠ほど不思議なものはない。  
 半分は鳥で  
 半分は鼠だ。  
 神はあらゆる生き物を作り、  
 それらに人間のような愛と恐れの心を与えられた。  
 それは、地上では私たち人間も彼らも等しく神の子であり、  
 一つの家族であることを示すためだった。

## 7

それから、私は刈り手の仕事をはかどらせる旋律を奏した。  
 葡萄酒の曲だ。  
 良き友情に手と手を取り合い、  
 目は目を輝かせる。  
 大きな心は更に拡大し、この世界の生命を感じて一つとなる。  
 次に、死者が墓場への道行きで讃えられる時の、  
 手向けなむの長い歌を奏した。  
 「その数少ない過ちは、枯れた花のようにしまい込んで、  
 連れて行け、彼を連れて行け。  
 私たちを慰める香油は、ここにはないのか。  
 棺の上に横たわる彼のような人物は、地上にはもういない。  
 ああ、兄弟よ、あなたをこの世に残したい！」  
 次に、結婚の喜びの歌を奏でた。  
 最初に、花嫁に付き添う若い娘たちが歩き出し、  
 次に、私たちの住まいの誇りである美しい自慢の花嫁、  
 その後に大行列が続いていく。  
 行列の人々は次々と走り寄って助け合い、  
 迫持せりもちを支えるので、何者もこれを壊すことができない。

誰が私たちの友人に危害を加えるだろうか。  
次には、栄光のうちに設けられた祭壇の前に、  
レビ人が進み出て詠唱する合唱曲を奏でた。  
しかし、ここで演奏を止めた。  
この暗闇の中で、サウルが唸り声を上げたからだ。

## 8

この静寂の中で、私は手を休めて息を飲み、  
離れたところで聞き耳をたてた。  
すると天幕が揺れ動いた。  
力強いサウルが身震いしたのだ。  
彼の頭巾ずきんの中では、宝石が覚醒して急に光り出し、  
その光線もが漏れ出てきた。  
壮麗に輝くサファイア、  
次に、芯から濃紅のルビーが光り始めた。  
彼の頭も光を発したが、身体はまだ動かず、  
そこに直立していた。  
私はもう一度堅琴に手をかけ、  
妨げられることなく演奏を続けた。

## 9

「ああ、男らしいサウルの若々しい生气！  
魂は衰弱を感じない。  
堅琴を奏でている間も、筋肉は動きを止めず、  
腱は張を緩めない。  
ああ、生きていることの狂わんばかりの喜びよ！  
岩から岩へと跳躍し、  
樅もみの木から枝を力強く引き裂く。  
淵の流れる水に飛び込む、銀のように冷たい衝撃、  
熊狩り、ライオンもねぐらに伏すと思われるほどの灼熱しやくねつ、  
目も眩むような金色の粉で一面が黄色になった、  
芳醇ほうじゅんなナツメヤシの食事。  
水差しに浸された蝗いなごの肉。  
杯に溢れる葡萄酒。  
乾いた河床での眠り。  
河床では、葦のさざめきが、かつて水が柔らかくさらさらと、  
音を立てて流れていたことを物語っている。  
人生は何と良きものか。ただ生きているだけで！  
永遠の喜びに溢れ、心、魂、感覚の全てを使うのは、  
なんと相応ふさわしいことか。

あなたは父上の白髪を愛しておられたのですか。  
栄えある戦功をたてよと、父上があなたに戦人たちを授けると、  
あなたは父上の剣を守り抜いた。  
人々が臨終の母上に引導の歌を低く唱えた時、  
母上の瘦せた手が上に差し伸べられた光景を、  
あなたはご覧になりましたか。  
その時、母上の弱い舌が証言に声を合わせられる間は、  
それに加わって、  
『もう一人、この私にも証言させてください。  
私は生きてきました。  
生涯を通じて神の御手を見てきました。  
そして、全ては最善でした』と語るのを、  
あなたは聞かれましたか。  
それから人々は強い勝利感で、  
涙ながらに、言い残したわずかの句を歌いました。  
また、あなたの助けともなり、  
競争相手でもある兄たちを見ましたか。  
泡立つ葡萄から、葡萄酒がにじみ出るように、  
彼らの働きから良い結果が生まれました。  
あなたの幼い時の友達、  
驚きと希望に満ちた少年時代、  
現在の約束、見える範囲を超えた未来の富を得て、  
見よ、ついに、あなたは王にまで上り詰めたのです。  
民はあなたのものです。  
この世が一つずつ提供する賜物の全てが、  
一つの頭こうべの上で結びついています！  
美と力、愛と怒りが、  
(岩の中に働いてお産を助け、  
黄金を生み出させる陣痛のように)  
一つの頭に集まっているのです。  
高邁な野望りょうがとそれを凌駕する戦功、  
これらに冠絶する名声、  
全ては一人の人物の頭上もたらに齎され、光を放ちました。  
それがサウル王なのです！」

## 10

見よ、かくも私の魂、心、手、豎琴、声は躍動して、  
それぞれがサウルという名のお方を悲しみより擡もたげ、  
その名声に相応しい栄光を享受させた。  
言わば、それは仕える喜びあふに溢れた神の万軍が、

隊列を成してひしめき合い、  
天使の戦車が空高く舞い上がる時のようであった。  
「サウル！」と私は叫んだ。  
そうして、後に続くものをじっと待っていた。  
すると、天幕の真ん中にある十字柱に寄りかかっていたサウルは、  
自分の名前が呼ばれたことに心を打たれた。  
あなたは、春の呼び声が矢のように的に直に命中する<sup>さま</sup>様を、  
あるいは、春の訪れに最後まで抗していた山が、  
(谷間の方は花々が自由に花咲いて笑っているのに、山だけが)  
その岩の広い胸の上に、胸当てのような雪を残こしていたが、  
ついに白衣のような雪の支配から逃れた様子を、  
見たことがありますか。  
突然、根雪が折り重なり、  
雷のような音を立てて山の麓<sup>ふもと</sup>へどっと流れ落ちる。  
すると、そこに荒涼として黒々としてはいるが、  
それでも生きている昔のままの山が、  
あなたの面前に出現する。  
山には、数えきれない程の年月にわたって刻まれた裂け目があり、  
それは正しく、あなたが戦った時に受けた傷跡だ。  
あなたの身を嵐から守ろうと山が頭を突き出した時に、  
そこに刻まれた窪みや割れ目、  
これらは目出度くも、今なお山に残っている。  
今、そこは緑の草木が再び生えて和らげられ、  
鳩の巣を守り、山羊と子山羊とを誘<sup>いざな</sup>って、  
夏の灼熱の中、頂上の緑地まで導いて餌を与える。  
一つの長い震えが天幕全体を震わし、  
ついには、空気そのものが疼いたものの、  
やがて落ち着いてきて、憑き物から解放され、  
意識を回復した王自身が私の前に立つと、  
空気は静まりかえった。  
いったい何が過ぎ去り、何が残ったのか。  
希望と絶望の間に去来する、全てのものが残ったのだ。  
死は過ぎ去ったが、生命はまだ来ていない。  
それで、彼は待った。  
しばらく、右手で額を押さえて、  
あまりにも空ろになった目が、  
視界に入ってきた新しい物を認識するのを助けた。  
サウルは昔と変わっていない。  
私は顔を上げて、敢えてサウルの目を凝視したが、  
それは秋のゆるやかな青白い落日が、

海の向こうに悲しげに沈んでいくのを、  
岸辺からじっと見守っている程には、  
私の目を傷つけなかった。  
この時のサウルの眼光は、  
厳かな沈黙の中で決意して、麓と麓を重ね合わせ、  
力をより強く結ぶに至った連山の向こう側に、  
ゆっくり没していく日の光に比すべきものであった。  
同様に、サウルは胸の上に腕を組んでいたが、  
その胸の高鳴りもゆっくりと静まっていった。

## 11

今や、歌が彼を回復させたからには、  
次は、どんな呪文、どんな魔術を駆使して、  
この状態を維持すれば良いのだろうか。  
(しばらくの間、私の内には迷いがあった。)  
歌は、力と美という純粋な実から生まれる、  
全ての果汁を絞り出して、  
この世の生命の葡萄酒で、サウルの杯をなみなみと満たした。  
この酒以上に、目を喜ばせ、唇に血を送り、  
目と唇が避けていた杯を気に入らせる、  
効き目の強い完全な酒ができる葡萄を、  
一体どこの畑で採集するというのか。  
「これは良い」と彼は言った。  
でも彼は飲まない。私に生命を称えさせ、  
同意を与えはするが、自身は死を願っていた。

## 12

すると、遥か以前<sup>まきば</sup>牧場にいた時に  
浮かんだことのある空想が、  
胸一杯に満ちてきた。  
かの時、私の周りでは羊が静かに草を食み、  
頭上では一羽の鷺がまるで眠っているかのように、  
ゆっくりと旋回していた。  
私は谷間に横たわり、  
丘と空の間の区域が見えただけだったが、  
鷺の視界に下にある世界を冥想したものだ。だった。  
私は笑ってこう言った、  
「私の日々は羊と過ごす運命だから、  
少なくとも平原と岩山を私の空想で満たし、  
今まで、決して交わることのなかった人生を夢見させ、

私など知る由もない<sup>よし</sup>習<sup>なら</sup>わしで生活している人々の姿を  
思い浮かべさせてほしい！  
人生の計画、その最善の規則と正しい使い方、  
人々が得ようと奮闘しているものを手に入れる勇気と、  
それを保持する慎重さを想像させてほしいものだ！」と。  
すると今、これらの漠然とした思想の古い群れが、  
再び押し寄せて来て、  
私の決意はより確実なものになった。  
それでもう一度、私の堅琴の弦は自分の霊に応答した。  
このように—

## 13

私はこう語り始めた。  
「そうです、私の王様、  
人と獣が共通に持っている、  
単なる死すべき生命から生まれる単なる慰めを、  
あなたが拒絶するのは正しいことです。  
私たちの肉体の中には、この世の生命の枝が生えていますが、  
魂の中では、枝は実を結んでいます。  
あなたは、木のゆっくりとした成長を見つめて来られた。  
最初、揺れていた幹も、  
ついには子供の口元や小鹿の<sup>えだづの</sup>枝角を越え、  
それから、扇のような枝が周りに無事に生え出します。  
今度は、これらの枝も蕾がほころんで花盛りとなり、  
棕櫚<sup>しゅうろ</sup>の木は完全な姿になった時のことを、  
あなたは覚えておられるでしょう。  
しかし、もっと学ぶべきことがありました。  
それは、棕櫚の実とともに良きものが生まれることです。  
実から出る果汁が、全ての悲しみに癒<sup>もたら</sup>しを齎してくれるのに、  
棕櫚の実を軽んじるでしょうか。  
棕櫚の緩慢な成長が果実を生み出してくれるのに、  
棕櫚自身の状態を心配するでしょうか。  
そうではありません！  
幹も枝も朽ちはてて、もはやその場所になくとも、  
棕櫚の酒は、冬になると人の魂の傷から  
流れる血を止めてくれます。  
私はあなたに、そんな酒を注ぎます。  
肉体は、それが相応しい衰退の運命に委ねてください！  
魂は、あなたのものでありますように！  
将来、老齢に打ち負かされても、



最初、無意識の内に感じた以上に、  
魂によって、少年の生命を享受できるでしょう。  
その生命を絞り、酒が流れ出すのを見てください！  
あなたの行為は一つひとつ死んでは蘇り、  
この世で役立ちます。  
地上を見下ろす太陽は、  
雲に覆われ、嵐にかき消されても、  
どこを見ても、自分の業わざが生み出したものばかりで、  
あらゆる所に、過ぎた夏の盛りの跡を探さねばならないように、  
あなたの意思から発せられる光線、  
はるか昔の熱情と勇気の輝きは、  
数えきれない全ての民を熱誠で震わせ、  
ついには民も息子たちに同様の歓声をあげ、  
今度は息子たちが、あなたの偉勲から生まれた光輝で、  
南も北も世界中を満たします。  
過去の酒をいっぱい飲んでください。  
しかし、過去を享受する老年の特権にも限界があります。  
あなたは、ついには死んでしまうのです。  
年老いて目も霞んだライオンは死に、  
薔薇は盛りを越えて枯れるが、  
人も同様です。  
人の力と美とは飛び去ります。  
否！もう一度、私の魂の気付け薬を長く飲んでください！  
ずっと先まで見通してください。  
今や、あなたは現実のものを見なくなりました。  
預言者の目をもって見始めて欲しいのです！  
もしサウルが死んだならば、  
谷底に彼の墓を作り、  
空に届くほど高く、四角に積み上げられた、  
灰色の大理石の山を出現させて、  
偉大な初代の王が眠っている場所の印としなさい。  
王様の名声を、君たちは知りたいなら、  
頭上にある岩のむき出しの表面を見なさい。  
そこには大きな文字で、ある記録が書記によって刻まれているが、  
そこに記された人がサウルだった。  
記録にあるように、賢者たちに仕事を指導してもらい  
庶民たしなに窘められながら事を為したが、  
サウルの偉勲の半分もそこに含まれていない、と民衆は思った。  
その欠陥を補うために、  
木立の中には、同種の木と一緒に杉の木が植わっていて、

(見よ、民衆の前で平らな板になった杉を)  
その板の上に彼らは贅辞を埋め尽くし、  
銘刻師めいこくしの金文字でサウルの物語を記録するだろう。  
政治家としての偉大な言葉と、  
詩人としての甘美な言葉が相並んでいる。  
預言者の声のように風が唸る時、  
滑らかなパピルスが川の中で、  
波のように揺れて互いに触れ合っている。  
この筆は、あなたの存在から受け継ぐべき役割を、  
まだ生まれていない世代の者たちに伝えるのです！  
それ故、力強き者の第一人者よ、  
あなたが生きていることを、神に感謝してください。』

## 14

私が歌う時に、ご照覧ください・・・  
しかし神よ、思い起こせば、  
あの日に、いやその前にも数多く、  
冒険を計画して実行し完成させるために、  
私を助けてくださいました。  
あの行為の中で、あなたは私の盾、私の剣となられ、  
私の魂はあなたの僕しもべであり、  
あなたの言葉は私の言葉でした。  
どうか私と、これからも共にいてください。  
私は人間として努力を尽くし、  
人の思いが量ることのできる、最上のものを量りながらも、  
相変わらず希望なく、  
頭上の天の新たな広がりを見つめていましたが、  
人を救うことに力強いお方よ、  
あなたが御手ひとたびを一度振り挙げてくださると、  
人の墓から神の玉座までの距離は除かれました！  
心の思いに声を合わせて、  
私の話を最後まで語らせて下さい。  
昨夜、自分が体験した驚くべき出来事を、  
私の心はほとんど信じることができず、  
今朝、羊を連れて、あの体験の断片を拾い集めると、  
強烈な栄光が、あたかも羊のように消え去って行くのではないか、  
こんな恐れがいまだに湧いてきます！  
ヘブロンは、夜と争っていた夜明けを肩の上に持ち上げ、  
キドロンは、昨日の熱射による水不足をゆっくりと回復し、  
私は、灰色の露に濡れた隠れ家で目を覚ましたからです。

## 15

それ故、言わせてほしい。  
このように歌って王様を安心させ、  
王を慰める良きものを一層力強く提供すると、  
彼はゆっくりと、王に相応しい昔の拳措と習性を回復した。  
右の手は黒髪をいつもの落ち着いた形に整え、  
ターバンの髪を調節した。  
見よ、王は顔にかいた沢山の汗を服で拭っている。  
今、昔のように腰紐を締め直し、  
留め金を前に戻して、  
高価な腕飾りをゆっくりと手探りしている。  
彼はあのサウルです。  
過ちを犯したために、神との日々の交わりから離れ、  
その広い額を神から背ける以前の、  
あの栄光の姿を、あなた方は覚えておられるでしょう。  
あなた方が面前に見ている、  
サウルの活力と態度が大いに衰えたとしても、  
人がどんなに浪費し冒瀆しようと、  
決して失われることのない天稟を体現する器として、  
神が選ばれたのは、まさしくこの人です。  
こうして天幕の柱のそばに蹲ったが、  
ついには鎧や軍衣、上着の山に支えられ、  
しばらくそこに寄りかかり、  
私の歌を終わりまで聞いていた。  
王は片腕を天幕の柱に廻して、  
うつむいた頭を擡げようとしたが、  
もう一方の腕はだらりと垂れ下がっていた。  
あらゆる時代の全ての人々から、  
サウルに送られるに違いない賛辞を私は歌い、  
その場で苦悩に耐えていたお方に捧げた。  
こうして歌い終わり、豎琴を前に降ろした。  
この時、私の頭をその大きな膝の上にのせて、  
サウルが座っていることに、初めて気づいた。  
王の両膝は、眠っている子羊を取り囲みたいと思っている、  
檜の木の間の子の様に、私の身体の両側に差し出された。  
私は力の限り弾いた最善の演奏が、  
慰めを齎したかを知ろうと顔を上げた。  
彼は語らず、傍らにだらりと垂れていた手を  
ゆっくりと持ち上げた。  
その後、柔らかくも厳かな注意を払いつつ、

しかも穏やかながら確固たる意志をもって、  
その手を私の額に置いた。  
王はその大きな指で私の髪をすき、  
やさしい力で私の頭を後ろに曲げ、  
人々が花を愛でるように、  
じっと見つめようとして、私の顔を仰向かせた。  
こうして彼は、私の目を吟味する大きな目で、  
そこに私を捉えた。  
ああ、私の心が全てをあげて、  
いかに彼を愛していたことか！  
しかし、どこにその徴しるしがあったのか。  
私は切にこう願った。

「私の父よ、至福の状態を創り出して、  
あなたを助けられるのなら、  
あの過去の人生に来世と現世を付け加えたいのです。  
私はまったく新しい人生を、今からのち時間が経っても、  
この瞬間と同様の素晴らしい人生をあなたに与えたい。  
もし愛に愛の心を行う確証があるならば。」

## 16

その時、真実が私に迫って来た。これ以上豎琴はいらない。  
もう歌もいらない。言葉が湧き出て来た。

## 17

「私は創造の業わざを思い巡らし、全てを歌い尽くした。  
私は見て、語った！  
そうすることが、神の御手の業なる私の造られた目的なのだ。  
自分以外の御手の業を頭脳に受け止めて、思うところを述べ、  
神の創造についての是認、あるいは咎とがめだてを神に再び報告した。  
私は見た通りに語った。  
人が神の業を伝えるに相応しい方法で報告しよう。  
全ては愛であるが、同時に全ては法則である！  
だが今や、神が私に与えた裁き人の地位を捨てよう。  
神を認める任務を課せられた能力おのおのは各々、  
一滴の露が求められたところで深淵の水を得た。  
だが、私には知識があるのか。  
知識は啓示された知恵を見て困惑し、  
身の縮む思いがする。  
私には先見の明があるのか。」

あるにしても、神の無限の配慮と比べれば、  
いかに愚鈍で、虚ろなことか！  
私は最高の能力を駆使して、成功を思い浮かべるのか。  
ただ私は目を開ける。すると、心に描いた通りの、  
完全な姿そのものが眼間に見えてくる。  
そして、星の中に、石の中に、肉体の中に、  
魂の中に、土塊の中に、神は神として認められる。  
こうして、自分の内側と周辺を見つめつつ、  
(屈むことによって自らを高める、魂の遜りをもって)  
何一つ完全ではない人間は、  
全てを完成させる神に帰依する思いを新たにし、  
御霊への新しい服従によって、  
神の御許に上り行く。  
しかし、この溢れるばかりの経験の全てをもって、  
この神の性質が知られたからには、  
私はあえて自分自身の領域と賜物を発見しよう。  
行使することが嬉しく、抑えておきたくとも、  
隠すのが困難な一つの能力があるものの、  
(考えると笑ってしまいそうだが、)  
愛の能力を持つと自慢し、  
これを見せびらかそうとすることによって、  
お分かりのように、この一つの賜物を与えて下さったお方さえ、  
負かしてしまうことのないように、  
私はこれを静かに抑えたいと思っている。  
見よ！私は、その気になれば愛することができるのだ！  
しかし、愛の一方面においては、  
人たる者が、神自身の成功をも凌駕してしまわぬかと畏れて、  
この主張を言わないで隠しておこう。  
愛のゆえに、私は慎む。  
何ということか、私の魂よ。  
ここまで見てきていながら、  
もっと先があるのを見ようとししないのか。  
九十九の扉は大きいものも小さいものも、  
触れるとすぐに開くなら、  
百番目の扉が開いたとしても、驚くことがあるだろうか。  
最も小さいものを信頼するのに、  
全ての中で最も大きなものを信じないのか。  
私の性質の中に、神の究極の賜物である愛が溢れているのを見て、  
神自身の愛がそれと争えるのかと、疑うことなどあり得るだろうか。  
ここでは、役割が入れ替わっているのか。

ここでは、造られた者が造り主を凌駕りょうがするのか。  
終わりの者が初めの者を越えるというのか。  
私でさえ無力ながらも切なる願いを持って、  
この人のために出来る限り、  
あらゆる事を為したいと願うのに、  
神だけがサウルを助けないなどと、  
あえて疑うようなことがあるだろうか。  
真実を言えば、神のみが助け得るのだ。  
王に授けられ、その内に満ちていた生命の驚くべき賜物、  
私が歌ったこの賜物を、  
サウルに授けようとする意志だけでも、  
力ちから及ばずながら私の心に浮かばないことがあろうか。  
(溢れる熱涙が表しているように)  
あのような魂、あのような身体、あのような土塊つちくれを  
全てを包み込む器に変えよう、  
という思いが私に湧かないであろうか。  
これらの良きものが与えられているからには、  
さらに進んで、もう一つ、  
最善のものを与えようという思い、  
まさしくサウルを救い、贖い、回復させ、  
この完全な状態を高く保ち、  
夜の死の刹那せつなを過ぎ去らせ、  
生命の曙あけぼのを来たせようとする思いが湧かないであろうか。  
イスラエルが困難な時に身を投じたが、  
やがて間違いを犯したサウル、  
失敗して敗残はいざんの身に姿をやつしたサウルを救い出して、  
夢、試練、準備の段階から目覚めさせ、  
新しい光と新しい生命の中にすっかり組み入れられ、  
安寧を得た自分自身を認識するように促したい、  
という思いが浮かばないであろうか。  
これは新しい調和であって、  
これから追求し、継続し、終えるべき、  
—いや終わるかどうかは誰にも分らない—  
あるいは、永続すべきものである！  
この人は、この世の夢に十分に教えられて、  
死後の安息について確信し、  
痛みの疼うずきによって、なおさら強められた祝福を高らかに勝ち取り、  
この世での苦闘により、来世の報いと休息を得るだろう。」

## 18

「私はそれを信じます！

神よ、与えるのはあなたであり、  
受けるのは私です。

最初の中に、最後があります。

あなたの御意の中に、私の信じる力があるのです。

全ては一つの賜物です。

この息を吐き、この腕を天に上げると、

即座に私の祈りに応えて、

更なる賜物を授けて下さいます。

あなたの御意から、世界と生命と自然、

さらに恐るべき軍勢が流れ出てきます。

そのようなことが、私の意志でできるでしょうか。

塵さえも私を蔑むのに！

何故、私はこの蔑みを直視するのを厭わないのか。

何故、この無力さを敢えてただ軽く見るのか。

何が私の絶望を止めるのか。

これである。

人を高めるのは、その為すところではなく、

為そうと欲するところである！

王を見て欲しい。

王を助けたいが、私にはできない。

願いは無駄に終わる。

苦闘しつつも王を悲しみから引き上げて富ませるために、

自らは貧しくなり、自分の命を飢えさせても、

王の命を満たすことができるなら、

私はそうすることを願っている。

このことを知って、私の奉仕は完全であると悟る。

ああ、私を通して語ってください！

私は愛する王のために、苦しむことを欲するだろうか。

私ですらそうならば、

ましてや、あなたは王のために苦しむことを願われます。

きっとそうして下さいます。

このことの故に、あなたには究極最上の、

筆舌に尽くしがたい栄冠が冠せられ、

あなたの愛は無限の空間を隈なく満たし、

被造物が立ち入る隙など、上にも下にも残されなんでしょう！

救いが死と争うのは、

息遣いや目の動き、手を振ることによってではない。

あなたの愛が全能であると証されたように、

愛とともにあり、愛のためにある、  
人に愛せられる力も全能であると証明されますように。  
最も多く為した者が、最も多く耐えるだろう。  
最も強い者が、最も弱い者になろう。  
私が叫び求めるのは、強さの中にある弱さ！  
神性の中に求めるのは、私のような肉性。  
私はそれを求め、見出す。  
ああ、サウルよ、あなたを受け入れる者の顔は、  
私のような顔をしている。  
私に似たお方をあなたは愛し、  
永遠に、そのお方に愛されるだろう。  
この手のような御手が、新しい生命の門をあなたに開くであろう。  
見よ、キリストが立つ！

## 19

その夜、どのようにして家に帰ったか、よく覚えていない。  
私の周りには、右にも左にも万軍の証人が群がっていた。  
天使、力ある者、語られず目に見えない者、  
生きている者、意識ある者がいたが、  
私は彼らの動きを抑え、  
あたかも死活を左右する知らせを待ちわびる、  
民衆に囲まれた中を進む急使のように、  
その中を藻掻きながら、辛うじて通り過ぎた。  
全地は目覚め、地獄は捕えていた者たちを開放した。  
夜の星々は熱情的に鼓動し、震え、  
知ってはいても口に出せない知識を秘めているが故の、  
強い痛みを炎と燃える光の中に解き放ったが、  
私は気を失いはしなかった。  
神の御手が私を駆り立てるとともに、  
支えて下さったからだ。  
御手は全ての騒ぎを抑え、  
静かな、聖なる命令を発してこれを鎮めて下さり、  
ついには歓喜も自らの内に閉じこもり、  
地は徐々に静まって休息に到った。  
間もなく夜が明け、全ての騒ぎは地上から引いていったが、  
新しい一日の穏やかな誕生の中で、  
この騒ぎがすっかり消え去る程ではなかった。  
山々を包む灰色の強烈な凝縮の中に、  
慄き震える森の抑えた息遣いの中に、  
突風の揺れ動きの中に、



驚きと怖れのため顔をそらし、  
それぞれ目を脇に向けてのそのそ逃げて行った、  
脅えた野生の獣たちの中に、  
そして、硬直して身は凍り、近づくと重たげに飛び立ったが、  
畏れのために茫然としていた鳥の中にも、  
騒ぎの名残が感じられたからだ。  
静かに滑り去っていく蛇でさえ、  
新しい法則を感じた。  
この法則は、露に濡れた白い花々が空を見上げている顔にも、  
はっきりと見て取れた。  
この法則は杉の樹心にも働き、葡萄の茂みを感動させた。  
そして、法則を目撃した小川は繰り返し低く、  
ほとんど聞こえない程の声で、絶え間なく、  
「まさしくその通り！その通りだ」と囁いた。

## 注

この翻訳は、ロバート・ブラウニング (Robert Browning) 作「サウル」(‘Saul’) の全訳である。この作品は『男と女 (*Men and Women*)』(1855年) に収められたもので、悪霊に憑かれて苦悶しているサウル (イスラエル初代の王) に向かって語られたダビデの独白である。翻訳に当たっては、底本として Ian Jack and Robert Inglesfield ed., *The Poetical Works of Robert Browning*, Vol. 5 (Oxford: Oxford UP, 1995) pp. 362-85を使用した。

